

グレアム・グリーンの短編

1. 「汚れなき者たち」

大島省子

The Short Stories of Graham Greene

1. "The Innocent"

Shoko OSHIMA

(序にかえて)

グレアム・グリーンの短編をもっと重要視すべきだという考えは、ここ10年、なぜか強まる一方である。例の「短編を長編小説家の境涯の副産物として提供するにすぎない」という作家自身の言葉にもかかわらず、作品を正確に丁寧に読んだ読者には、彼が又いかに優れた短編作家であるかは明白なのであって、グリーンの短編を、数多い彼の長編小説の註釈書としてのみ取り上げるような間違いは決して起こらないのである。『21の短編』は、1935年の初期の短編集『地下室』から1947年の『19の短編』に姿を変え、追加や入れ換え⁽¹⁾を経て、1954年に世に出た。ここには、1929年から1954年までに書かれたほとんどの短編を収録してあり、さながらグリーンの世界を一望の下に見渡す感がする。21の諸編はそれぞれに全く独立した作品なのだが、どの長編小説にも窺われるグリーンのグリーンたる特徴が顕著で、21の章から成る1冊の長編小説とみることが出来るほどである。本論では、『21の短編』の中から最もグリーンらしく、かつ優れていると思われる5編(1. "The Innocent", 2. "The End of the Party", 3. "I Spy", 4. "A Drive in the Country", 5. "The Basement Room")を選び、グリーンを論ずる際に欠くことのできない重要なテーマ「幼年時代」と「無垢と経験」に焦点をあて、グリーン文学の特質について、順に考察する。

第一回 「汚れなき者たち」(1937年)

【書き出し】短編におけるグリーンの書き出しはいつも見事である。

It was a mistake to take Lola there, I knew it the moment we alighted from the train at the small country station. On an autumn evening one remembers more of childhood than at any other time of year, and her bright veneered face, the small bag which hardly pretended to contain our "things" for the night, simply didn't go with the old grain warehouse across the small canal, the few lights up the hill, the posters of an ancient film. But she said, "Let's go into the country," and Bishop's Hendron was, of course, the first name which came into my head. Nobody would know me there now, and it hadn't occurred to me that it would be I who remembered.

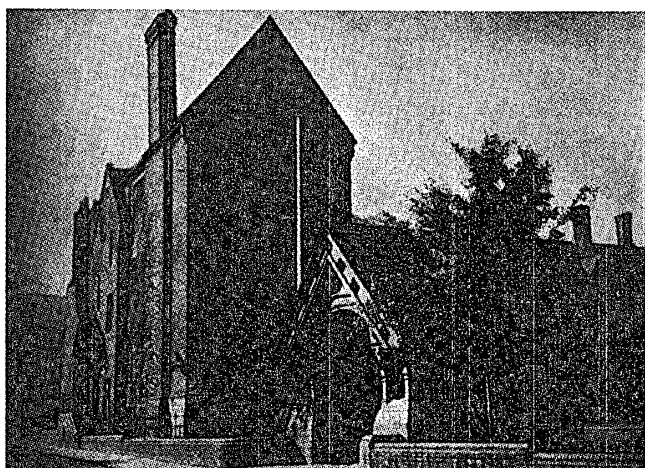
「ローラなんか連れてくるんじゃないかった…」と、小さな田舎の駅に降り立った瞬間から、「私」にこう思われてしまうような女。ローラとは一体何者なのか。そしてこの「私」とは？この二人はどういう関係なのだろう。親子か夫婦か、それとも恋人たちか。Bishop's Hendronという奇妙な響きの土地の名も気になる。「人目に立つ厚化粧の顔や、一夜を伴にする旅行用品が入っているとはとても思えないような小さな鞆」という表現から、察しの良い読者なら、少々自堕落な男が街の女を連れて一晩泊りのお遊びにやってきたの难道うかと思うかもしれない。しかも夫婦者にみせかけて、もうここでは誰も自分のことなど覚えていないだろうと「私」は思う。まさか思い出すのは自分の方であろうとは、「私」はこの時夢思わなかったのである。それにしても、秋という人恋しい、物悲しい、しかも夕暮れ時に、「私」は子供の頃の何を思い出すというのだろうか。

とにかく mysterious な導入である。読者はいやおうなしに推理し、想像する知的作業に追い込まれるが、これは勿論楽しい作業である。(この作業が楽しくない人は、グリーンの愛読者にはなれないかもしれない。)このように、読者の心を一気に物語の中に引き込んでしまうような mysterious で attractive な書き出しは、story-teller としてのグリーン为天分の一端を示すものである。しかも「私」という一人称形式を採用することによって、語り手の心の世界に引き入れるだけでなく、物語により強い現実味を与えることを、作者は勿論承知しているのである。グリーンは“Ways of Escape” (1980) の中でこの一人称形式にふれ、“The End of the Affair” (1951) と “The Third Man” (1950) を執筆した2年間、「一人称で書く修練を積んで本当によかった、ディケンズの影響による、私が一度も試みたことのない方法」と回想しているが、溯ること13年、すでに本作品を一人称で書き成功をおさめているのである。

物語に戻ろう。プラットホームから幼い日に遊んだ運河が見える。懐かしい穀物倉庫、古い映画のポスター。ここに生活した者でなければ分からない幼年時代の、あの懐かしい感覚がよみがえってくる。この駅に降りた瞬間、「私」の心の中に小さな事件がおきたのである。そのことに勿論ローラは気付いていない。幼年時代を懐かしむ気持(過ぎ去って戻らない無垢の時代)とローラを拒絶する気持(疎ましい^{いま}現在一経験の時代)のはざまに「私」の心は揺れる。Philip⁽²⁾少年にとって、あの the green baize door は、善と悪、天国と地獄を分ける境界線であり、無垢の世界から経験の世界に入る扉であった。グリーン作品には必ず、何か二つの世界を分けへだてる壁、境界になるものがある。「この小さな田舎の駅に降り立った瞬間から…」とグリーンは書く。好きで一緒に連れてきたローラ。この瞬間からローラは、「私」の心の中で拒絶の対象となり、この田舎の土地に対する「私」とローラの意識も異質のものになることに読者は注意したい。田舎へ行こうといわれて、何の迷いもなく (of course) 故郷を思って来てはみたものの、都会の女ローラは、周囲の風景と余りにもそぐわないのだ。

Even the old porter touched a chord. ... It was very dark, and the thin autumn mist, the smell of wet leaves and canal water were deeply familiar.

このローラへの拒絶反応が、現在の汚れた自分自身に対するものでもあることに気付かないまま、「私」は、年老いた赤帽を目にしただけで心がふるえ、運河の水や濡れた木の葉のにおいを楽しみと懐かしく感じているのである。では、ローラを拒絶するほど強く心ひかれるこの情景は一体何であろう。



BERKHAMSTED SCHOOL
Hell lay about them in their infancy.

【バーカムステッド】 Bishop's Hendron は、グリーンの生まれ故郷 Berkhamsted (ロンドリより27マイル) のことである。グリーンの人生を決定したとってよい13歳という時期、彼は天国と地獄の二つの国の住人であったと "The Lawless Roads" (1939) のプロローグで述べている。グリーンは、この地のパブリックスクールの校長であったため、学校という一つの建物の中で寄宿舎生活と家庭生活の両方が営まれた。グリーンはあの the green baize door を通って二つの国を

行き来していたのである。ここには a kind of lawlessness があり、the genuine quality of evil をもった生徒たち⁽³⁾がいて、ここで the misery of life が始まり、Everything one was to become must have been there, for better or worse⁽⁴⁾であったと作家は述懐する。今年、Norman Sherry⁽⁵⁾が出したグリーンについての好著の中にもバーカムステッド校の写真があるが、同じ白黒の写真でも、1951年10月29日の "TIME" (写真上) よりはるかに明るくとれてはいるものの、何れも陰うつな雰囲気を漂わせている。特に後者の場合、建物の上に長くつき出た煙突の陰から、クゥイントとジェスル⁽⁶⁾がそおとこちらを伺っているようにさえ感じられるほどである。「どうしてこんな所に…」と思うのは、何もローラ一人ではないかもしれない。「ねえ、田舎に行きましょうよ。」と言ったのはしかしローラだった。

Lola said, "But why did you choose this place? It's grim." It was no use explaining to her why it wasn't grim to me, that that sand heap by the canal had always been there (when I was three I remember thinking it was what other people meant by the seaside). I took the bag (I've said it was light; it was simply a forged passport of respectability) and said we'd walk. We came up over the little humpbacked bridge and passed the almshouses. When I was five I saw a middle-aged man run into one to commit suicide; he carried a knife, and all the neighbours pursued him up the stairs. She said, "I never thought the country was like *this*." They were ugly almshouses, little grey stone boxes, but I knew them as I knew nothing else. It was like listening to music, all that walk.

「もっと景色の良いロマンチックな田舎」を期待していたにちがいないローラはほやく。辺りはもう真暗。「どうしてこんな所にしたのよ。なんだか気味が悪いわ。」「私」は例の体面をつくろうための小さな鞆をもってやり、「私」の失われた時を求めてローラと歩き出す。運河、砂山、太鼓橋、醜い救貧院、「私」の目の前にあらわれるもの一つ一つが、まるで音楽でもきいているように、懐かしく甘美な感動を与えてくれるのに、ローラの方はというと、「田舎って、こおんな所だなんて、あたし思いもしなかったわ」と、ご気嫌は悪くなる一方である。

ここにある風景は、まさにグリーン幼年時代の風景である。バーカムステッドを再訪した時の様子を、グリーンは次のように書いている。

"I returned to the little town a while ago... I walked down towards my old home, down the dim drab high street, between the estate agents', the two cinemas, the cafés; there existed still faint signs of the old market town— there was a crusader's helmet in the church. People are made by places, I thought; I called this 'home', and sentiment moved in the winter evening, but it had no real hold... You couldn't live in a place like this—"

("The Lawless Roads")

「僕はここを（故郷）と呼んでみた、するとこの冬の夕暮れに感傷が動いた、…。故郷を失った人間の姿を描かせたら、グリーンの右に出る者はいないだろう。故郷とはそもそも故郷を失った人間のための言葉である。あの運河は、グランド・ジャンクションと呼ばれていた。海岸だと思っていた砂山、乳母と一緒にみた自殺志願の男、映画館も大通りも、グリーンの子供時代と共にあったこれらバーカムステッドの風景を、彼は多くの作品の中に登場させている。"A Sort of Life" (1971) や、アランとの対話の中でもくり返し言及しているところをみても、余程忘れ難い思い出があるのかもしれない。故郷というものへの愛着の情は、その感情が非常に私的な、その人の人生の歩みの中から生まれてくるために、長い年月を経て故郷を再訪したような時にはなおさら強さを増すものなのだ。たとえその場所がいかにgrimな、あるいは悲しい思い出に彩られた所であろうと、そこに生を受けた者でなければ分からない名状しがたい感情を人は有するものだ。人は「一切のものが生まれたこの土地に死にに帰ってゆく⁽⁷⁾」のであり、故郷への愛着は、「その後一度も私から去ったことはない⁽⁸⁾。」とグリーンはいう。だから、「私」の五感でとらえる総てのものが、たとえそれが醜い救貧院のような建物でも、いかに「私」の心の琴線をかき鳴らすかを、この土地とは縁もゆかりもないローラにいくら説明してみたところで仕方のないことなのだ。グリーンは、一人称形式に加え、自分の生まれ故郷とそこでの実体験を作品に取り入れることにより、感情移入を容易にし、バーカムステッドを再訪した時の想いで染めて、この作品を深みのある真実味あふれた秀作に仕上げている。

^{インセンス}
〔無垢のにおい〕ローラが、「私」の生まれ故郷を気に入らなかったとしても、それは仕方のないことなのだ。「ローラがここの生まれでないのは、何もローラのせいではないのだ」から。ローラを誘っておきながら、いつ迄も自分一人で懐古の想いに浸っているわけにはいかぬ。「ローラに何か話しかけなくては」と思いつつも、「私」は黙って歩き続ける。

But I had to say something to Lola. It wasn't her fault that she didn't belong here.

We passed the school, the church and came round into the old wide High Street and the sense of first twelve years of life. If I hadn't come, I shouldn't have known that sense would be so strong, because those years hadn't been particularly happy or particularly miserable: they had been ordinary years, but now with the smell of wood fires, of the cold striking up from the dark damp paving stones, I thought I knew what it was that held me. It was the smell of innocence.

特に幸せな、あるいは、特別に悲しい苦しい思い出なら、人は決して忘れることはないのだが、「私」のあの最初の12年間は、特に幸福でも不幸せでもなかったから、すっかり忘れてし

まっていたのだ。しかし大人になり、何十年振りかで生まれた土地に戻り、見覚えのある建物、懐かしい焚火や舗道の敷石から立ちのぼってくる寒気のおいをかぐうちに、そのおいが、「私」の未だ汚れを知らぬ、無垢な幼年時代のおいであることに気付く。それは、この土地に戻ってこなければ決して思い出さなかったであろうおいなのだ。「私」の心をつかんで離さなかったものは、あの最初の12年間の感覚、すなわち、この「無垢のおい」だったのである。

「私」ならぬグリーン、生まれ故郷バーカムステッドでの最初の12年間も静かで幸せであったと、作者はマリー＝フランソワーズ・アランとの対話の中でも述懐している⁽⁹⁾。

A state of happiness. My childhood was extremely peaceful until thirteen, when I was taken away from home and sent to boarding school.

しかし13歳を境に、それまでの家族との暖かな生活から切り離されて、「決して静けさのおとずれることのないあの恐ろしい学寮」に入り、人生の恐ろしさ、人間の悪に眼を開かされ、無邪気なあの子供部屋から出て、経験の世界へと入ってゆくのである。グリーン的人生を決定したとてよい、この地獄の学寮の中には、コンパスでグリーンを拷問してきたコリファックス⁽¹⁰⁾がいた。悪の天才カーター⁽¹¹⁾がいた。裏切り者のワトソン⁽¹²⁾がいた。

The horror began at thirteen. The school world really was horrible. There was no privacy. The w. c. doors could not be locked; the boys never stopped farting around me.

(“The Other Man”)⁽¹³⁾

この学寮での恐ろしい経験の他に、もう一つ、グリーン作家としての一生を決定したものがあつた。それは、14歳の時に読んだ、マージョリー・ボーエン女史の“The Viper of Milan” (1906)である。この二つによって作家グレアム・グリーンが誕生したのであり、後に彼が“The Lost Childhood” (1951)の中で、「善が完全な形で人間の肉と化したのはただの一度限りで、二度と再びそのようなことはないだろう。しかし悪は常に私達の体内にある。人間の本性は黒と白ではなくて、黒か灰色なのだ…まわりを見まわして、私はそれが真実であるとわかったのだ」と書くに至つたのである。少年グリーンは、バーカムステッドの公有地に隠れ、デラ・スカラ⁽¹⁴⁾の仮面をかぶって逃亡するという方法を見つけ、あのいまわしい少年時代から出てゆくことになる。“The Man Within” (1929) 他の作品にみる「追う者と追われる者」というグリーンの代表的な小説のテーマは、ここから始まつたのである。13の歳を境に、あの幸せに美しく輝いていた無垢の雲は消えうせ、以後、グリーンは、原罪によって宣告された人間の罪の世界を苦悩しながら、心の平和やすらぎ、神の恩寵を求めて果てしのない求道の旅人となつたのである。

【ローラ】「無垢」はグリーンのもっと大切なテーマの一つである。「私」の心をとらえて離さなかつた「無垢のおい」に気がつくと、一層ローラがうとましく思えてくる。「いい宿屋があるよ。」とは言つてみたものの、夜のお楽しみその他は、私たちが喜ばせてくれるようなものは何一つない小さな田舎町。「私」の心をとらえて離さない「無垢のおい」に、作者は「経験」という名の香水をつけたローラを配置することを忘れない。

But the worst of it was that I couldn't help wishing that I were alone. ...

I could have been very happy that night in a melancholy autumnal way, wandering about the little town, picking up clues to that time of life when, however miserable we are, we have expectations. It wouldn't be the same if I came back again, for then there would be the memories of Lola, and Lola meant just nothing at all. We have happened to pick each other up at a bar the day before and liked each other. Lola was all right, there was no one I would rather spend the night with but she didn't fit in with *these* memories.

「ローラなんか連れてくるんじゃなかった」の書き出しで、しっかりと読者の気をひいておいた作者は、物語の効果をしっかりと計算した上で、やっとローラの正体を明らかにする。そしてこの「私」にとっても、ローラは一体何であるのかを改めて意識させる。「人がどんなにみじめで、悲しい境遇にいようと、まだあの希望の雲が美しく輝いていた少年の日、あの日に立ち戻る手がかりを一つ一つ拾い集めながら、この小さな町をひとりさまようことができたらどんなに幸せなことだろう」と「私」は思う。しかしそのためには、ローラが邪魔なのだ。もう一度別の日にきてみるのはどうだろう。いや、その時には、今夜のローラとの思い出が入り混ってくるであろうから、今と同じような気持にはなれないだろう。凋落の秋にふさわしい、もの悲しい気持で、あの無垢のにおいの示す懐かしい少年の日の思い出に、純粋な気持で立ち戻れる日は、今日をおいてはないのだと「私」は思う。でもローラが…。ローラは、バーで偶然に知り合った街の女である。ジャーミン・ストリート⁰⁴で働いていたかもしれない。「私は」彼女の香水のかおりが気に入っていたし、色合いのよい彼女の口紅も好きだった。とにかく、お互いに気に入って一夜を伴にすることになったのだ。ローラは一夜のお遊びのお相手としては申し分のない女であった。いや、むしろ、少々ふしだらな生活を送っている現在の「私」には、ぴったりの女といえるかもしれない。ローラと「私」は同じ世界に住む人間なのだと、「私」は少しずつ気付いてゆくが、駅に降り立って以来二つに引き裂かれた「私」の心は、ローラの香水のいいにおいよりも、あの「無垢のにおい」により強くひかれるのをどうすることもできない。どこか他の場所へ、例えば軽井沢、いいやメイドンヘッドにでも行けばよかったのだ。そうすれば、「私」もローラもこんなみじめな気持にならずに済んだのに。ローラが悪いわけではないのだが、それにしても、「私」の幼き日の思い出にはあまりにもそぐわないのだ。その理由が、まだここでは、「私」にも読者にもわからない。作者は、ここにローラを配置することによって、「無垢」を際立たせ、この辺りから、この作品の表題が暗示する主題、すなわち「無垢」とは一体何なのかを明らかにしようとするのである。「無垢なる者」、「汚れなき者」とは一体誰のことか。「無垢のにおい」は、「私」に何を思い出させようとしているのだろう。

【子供の情景】「私」は、別荘地へと続く左へ折れる急な登り坂のことはすっかり忘れていた。その坂道にさしかかった時、「私」の心の中で何かが疼いた。子供達の一群が、坂道をかけ降りてきて、冷え冷えとした街燈の明りの中に入って来た。

They all carried linen bags, and some of the bags were embroidered with initials. They were in their best clothes and a little self-conscious. The small girls kept to themselves in a kind of compact beleaguered group, and one thought of hair ribbons and shining shoes and

the sedate tinkle of a piano. It all came back to me: they had been to a dancing lesson, just as I used to go, to a small square house with a drive of rhododendrons halfway up the hill. More than ever I wished that Lola were not with me, less than ever did she fit, as I thought "something's missing from the picture." and a sense of pain glowed dully at the bottom of my brain.

少年少女たちのかん高い声、白く吐く息。みんな麻の手さげかばんを持っている。自分の頭文字を縫いつけた子供もいる。晴着を着ていることを少し意識し、おすましして…。あの髪につけたリボン、ピカピカにみがいた靴、もの静かなピアノの音色、そうだ、「私」も、あの坂の途中にある四角い小さな家に、車寄せにいつも石楠花が咲いていたあの家に、ダンスを習いに行っていたのだ。この子供たちはダンスのレッスンから帰るところだったのだ。ここにはまさに「私」の幼年時代の情景があった。でも…何か足りない。何か欠けていると思った瞬間、頭の奥底に痛みのようなものが走る。失われた時を求めて必死にあの幼年時代に立ち戻ろうとするのだが、そばにいるこの商売女のローラが、「私」の行手を阻んでいるように思えてならない。一人にならなくては。宿のバーで、都会から来たローラに一杯おごりたくてさっきからうずうずしている土地の男にローラをあずけ、「私」は宿を出る。

子供の情景はいつも無邪気である。R. L. スティーブソン (1850-1894) が、子供に返って歌った詩集、“A Child's Garden of Verses”(1885) の世界を彷彿とさせるような情景である。晴着を着た時のあのちょっと大人になったような気分、ほんの少し男の子を意識しながら、女の子同志でかたまって。グリーンは子供を描くのが上手な作家である。そういえば、ジェイムスもディケンズもそうであった。「一切の書物とはある意味では告白である。…グリーン作品は殆ど他に置き換えができない自伝として読むことが出来る。」¹⁰⁹とパンジュは述べている。確かにグリーン作品には、グリーン生涯を研究してきた人にはすぐそれとわかるような個人的経験が素材としてふんだんに用いられているのは事実である。しかし、作品の内容、ストーリーが、グリーン個人的な生活そのものではないことも、賢明な読者には明らかであろう。数多い長編小説の序でも、グリーンは幾度か明言している。「作品に登場する人物は、一人として実在する人物ではない。」と。いいかえれば、このような断りを必要とする程、作中の人物がまるで本当に実在する人のようによく描かれているということなのだ。まわりを見まわせば、私達は、そこそこにフィリップやピンキー、チャーリーの兄弟姉妹を見い出すことができるのである。勿論ローラのような女も、「私」のような男も。グリーンの手にかかると、その辺の風景も、ちょっとすれちがった見知らぬ人も、まるで昔からよく知っている場所や人間のように思われてしまうのだ。グリーン自身は次のように述べている。

... I still think, though, that one has to avoid being dominated by a character, becoming attached to it or too involved in it, even if that character happens to be oneself.

(“The Other Man”)

グリーンは魂^{こころ}を大切に作る作家である。この作品でも、残っているというだけで重要な幼年時代の思い出を大切に拾い集めている。だからといって、ローラはグリーン妻のヴィヴィアンだとか、グリーン初恋は7歳だったと決めて読むと大きな間違いをすることになる。確かにグリーンも幼年期に、留金つきの黒い光った靴をはいてダンスのレッスンに通っていた。

しかし初恋の人は、9歳か10歳年上の家庭教師であった⁹⁹。くり返すが、グリーンは、自分の幼年時代の思い出の断片をていねいに拾い集めることによって、一つの新しい作品を生み出したのである。そして、この作品を書きながら、「私」が幼年時代を追いかけるように、グリーンも又、彼の少年時代の中に帰っていたということはできるかもしれない。

【子供の恋と苦しみ】「私」はあの坂道を登って行った。あの四角い家は、やはり、そこにあった。ダンスのレッスンのためのピアノの曲は昔と違ってはいたけれど、時間割は変わっていないようだった。「私」は門の中に入り必死に思い出そうとしていた。さっきの子供たちの情景に欠けていた何かを。

I was trying to remember. ... I don't know what brought it back. I think it was simply the autumn, the cold, the wet frosting leaves, rather than the piano, which had played different tunes in those days. I remembered the small girl as well as one remembers anyone without a photograph to refer to. She was a year older than I was: she must have been just on the point of eight. I loved her with an intensity I never felt since, I believe, for anyone. At least I have never made the mistake of laughing at children's love. It has a terrible inevitability of separation because there can be no satisfaction. Of course one invents tales of houses on fire, of war and forlorn charges which prove one's courage in her eyes, but never of marriage. One knows without being told that that can't happen, but the knowledge doesn't mean that one suffers less. I remembered all the games of blind-man's buff at birthday parties when I vainly hoped to catch her, so that I might have the excuse to touch and hold her, but I never caught her; she always kept out of my way.

「私」はついに思い出した。あの少女のことを。冷たい濡れて凍てついた木の葉、そう秋が思い出させてくれたのだ。「無垢のにおい」の影に立っていたのは、あの無垢の精は、あの少女だったのだ。写真などは必要がなかった。ちょうど八つになるころだったあの子のことを、七つの「私」は愛していたときっぱり言い放っている。ここはまさにグリーンである。「他の誰にも、今迄一度も感じたことのない烈しい真剣な気持であの子を愛していたのだ。少なくとも私は、子供の恋を鼻で笑うような過ちは一度も犯したことはなかった。子供たちには、その愛が満たされ叶えられるということがあり得ないが故に、必ず辛く恐ろしい別離が待っているのだ。」人生経験の未だ少ない子供たちには、自分たちのこの烈しい感情に「恋」とか「愛」という名前がついていることすら分かっていない。子供にできることといえば、好きな女の子の目に自分が勇敢な男の子だと映るように、火事や戦争や、決死の突撃物語など、いかにも子供らしい、いじらしいほど可愛い話をでっち上げるぐらいがせいぜいなのだ。だが、結婚の話だけはだめなのだ。「結婚」なんてことは決して起こりえないことを、誰にも教えられなくたって彼らはちゃんと知っている。しかし、知っているからといって、それだけ苦痛が和らぐわけではないのだ。あの少女に対する自分の気持をどう表現したらいいのか、目かくし鬼ごっここのドサクサにせめてあの子の手に触れて、一瞬たりとも抱きしめていられたらと願うのだが、いつもむなしい結果に終るのだ。頼みのダンスのレッスンは、却って別れをつらいものにしてしまった。

この子供のみじめな気持を、私たちは決して笑うことが出来ない。お互いにどんなに愛し合

っているか分かっていても、その気持をどう現わしていいか分からずに子供たちは苦しむのだ。子供は、無知なるが故にお互いの気持を育てていく方法を知らない。子供の苦しみは痛ましい。彼らも又、大人のように苦しむのだ。子供だからといって苦しみが半減するわけではない。むしろ子供なるが故に、無知なるが故に痛みは増すかもしれないのだ。グリーンはここで「初恋」というものに一つの定義を与えているように思う。少年少女の間には、恋は実ることがない、実らないのが初恋というものなのだ。「私」の頭の奥底で疼いていた痛み、それは、二度と戻ってくることはない、あの懐かしい幼少年時代に、一緒にダンスを習っていたあの少女に寄せる「私」の初恋の痛みだったのである。

〔クライマックス〕秋の夜、ピアノの物悲しい音色、失恋の苦い味とくるともうほとんどお涙頂戴の通俗小説になりさがるかと思われるぎりぎりの所で、グリーンは筆を冴える。「私」はついに思い出したのだ。あの少女との悲しくも清らかな初恋の痛みを。襟元に寒気を感じ、「私」は幼年時代の思い出から現実の世界に立ち帰る。

I shivered there in the mist and turned my coat collar up. The piano was playing a dance from an old C. B. Cochran revue. It seemed a long journey to have taken to find only Lola at the end of it. There is something about innocence one is never quite resigned to lose. Now when I am unhappy about a girl, I can simply go and buy another one. Then the best I could think of was to write some passionate message and slip into a hole (it was extraordinary how I began to remember everything) in the woodwork of the gate.

現在の「私」は、女のことでみじめな気持になれば、簡単に金を払って別の女を買ってくる方法を知っている。今の今、そうしてここに来ている。あの幼き、汚れなき日に始まった長い人生の旅路の果てに、「私」が見い出したものがあのローラだけだったなんて…。ローラとあの少女とではあまりに違いすぎるのだ。女性を単に快樂の対象としてしか考えなくなった今のみじめな自分。「私」は、ここに至ってやっと、あのローラへの拒絶反応はまさに、自分自身の今の有様、生き様に対する拒絶であったことを認知する。「無垢というものには、人が絶対失いたくないというような何かがある」ものだ。あの幼き日、「私」に考えられる手立てといえは、何か熱烈なことを書いて、この木の門の穴の中に入れておくぐらいがせいぜいだったのだ。（それにしても、どうしてこんなに何もかも思い出せるのか）その言伝てのことを、あの子に一度だけ話したことがあったが、言伝てはいつだって穴の中に残ったまま。ダンスのレッスンの度に感じたあの失望の気持もいま、まざまざと思い出されるのである。期待していたことが起こらなかった時の悲哀は、グリーン作品に登場する子供たちにはよく分かるのだ。

The sensation of disappointment was one which Philip could share; knowing nothing of love or jealousy or passion he could understand better than anyone this grief, something hoped for not happening, something promised not fulfilled, something exciting turning dull.
(“The Basement Room”)

フィリップも、フランシスも、そうあのフレッドのガールフレンドも⁴⁷⁾。皆暗闇の中で脅え、失望しながら人生を経験する兄弟姉妹たちには本当によく分かるのだ。

〔どんでん返し〕 グリーンの短編では、クライマックスは必ず作品の終りにくる。本作品ではさらにどんでん返しがあり、短編の名手としてのグリーンの筆の運びは見事である。最後の二節は非常に含蓄の深い所であり、あえて拙訳をほどこしたい。

As I went out of the gate I looked to see if the hole existed. It was there. I put in my finger, and, in its safe shelter from the seasons and the years, the scrap of paper rested yet. I pulled it out and opened it. Then I struck a match, a tiny glow of heat in the mist and dark. It was a shock to see by its diminutive flame a picture of crude obscenity.

There could be no mistake; there were my initials below the childish inaccurate sketch of a man and woman. But it woke fewer memories than the fume of breath, the linen bags, a damp leaf, or the pile of sand. I didn't recognize it; it might have been drawn by a dirty-minded stranger on a lavatory wall. All I could remember was the purity, the intensity, the pain of that passion.

私は門を出る時、まだあの穴が残っているかどうか確かめた。穴はちゃんとそこにあった。私は指を入れてみた、すると、四季の移り変わり、年月の流れにもめげず、安全なその隠れ場所の中にあの紙切れは残っていた。私はそれを取り出し開いてみた。それからマッチをすった。霧と暗闇の中に小さな暖かな火がともった。次第に小さくなる炎のもとで幼稚な猥画が浮かび上がるのを見た時、私は愕然とした。間違いではなかった。いかにも子供っぽい不正確な男女のスケッチの下に、この私の頭文字が入っていたのだ。しかし、この画は、あの子供たちの白い息や、麻の手さげ、湿った木の葉、あの砂山ほどにも、私の記憶を蘇らせてはくれなかった。第一、私はこの画を書いた覚えがなかった。それはまるで、どこかの見知らぬ心汚れた男が、便所の壁に残した落書きのようであった。私が覚えているのはあの時の自分の情熱の純粋さと烈しさそして苦痛だけであった。

それにしても「私」はどんな熱烈なことを書いたのだろう。初恋にふさわしい美しい詩の一節？と思ったかもしれない読者と「私」の前に、作者は下手くそな猥画を提示する。七つの「私」はなんと心の汚れた少年であったことか。それでなくてももう十分、現在の自分には嫌気がさしているのに、行間からもれてくる深い溜息だけで、「私」の失望振りはもうこれ以上説明の言葉を必要としないだろう。ついさっきまで、懐かしさでまるで音楽でも聞いているような夢見心地な気分を通った道を、今、何かに裏切られたようなわびしさを引きずりながらローラの待つ宿へと戻るのである。

〔愛の証し〕

I felt at first as if I had been betrayed. "After all," I told myself, "Lola's not so much out of place here." But later that night, when Lola turned away from me and fell asleep, I began to realise the deep innocence of that drawing. I had believed I was drawing something with a meaning unique and beautiful; it was only now after thirty years of life that the picture seemed obscene.

私は最初、まるで裏切られたような気がした。「結局」と私はつぶやいた。「ローラはこの土地にそれほど不釣合なわけではないのだ。」と。しかし、その夜遅く、ローラが私に背を向けて寝込んでしまってから、私にはあの画の深い清らかさが分かり始めたのだった。私はあの画を書きながら、ぼくは今、特別なとても素適な意味のあること書いているんだ、と信じていたのだ。あの画が猥せつなものに思えたのは、30年という年月がたち、私の心がすっかり汚れてしまったからにすぎなかった。

グリーンの作品では、追う者と追われる者が同一人物の内で行われることがある。ここでも、「私」は、無垢のにおいて追われるように、「私」の幼年時代を追いかけてきた。その幼年時代に「私」は裏切られたように感じたが、それは違うと教えてくれたのはなんとローラだったのだ。あの画を書いていた時の「私」の気持は、今さっきローラに向かった時のそれとは全く異質のものだった。7歳のぼくは、あの少女に必死に訴えたかったのだ。ぼくがどんなに君を愛しているかを。あの少女の目に、ぼくがどんなに勇気のある、強い、何でも知っている男の子か、その姿を焼きつけたかったのだ。そしてあの画は、あのつらい別離の時を前にして、少女に会えなくなる少年の苦しみが生んだ精一杯の愛の表現、いじらしいほどに汚れのない、一途な愛の証しであった。モーリャックは言う。「グリーンの小説の中に、私がはっきりと見出すものは恩寵である。」⁹⁸と。この作品の中で、神の愛の証しは果たしてこの「私」一人だけに示されたのだろうか。汚れなき、無垢なる者は、この「私」一人であったろうか。あのキリストの慈愛に満ちた、聖なるまなざしが、「私」の心の中に起こったことなど何一つ知らずに、傍らで、幼な児の如く無邪気にぐっすり眠ってしまったローラ、この薄幸な女の上にも同じように注がれているのを感じずにはいられない。このローラにも、あの子や「私」のような汚れなき幼年時代があったのだから。「私」が再びこの地を訪れるようなことがあったとしても、「私」は二度とローラを拒むことはないだろう。そして「私」は思い出すに違いない。「ローラは全く申し分のない女だった」と。私の心の中に、一時であれ、平和やすらぎが戻ってきたようだ。「無垢」を忘れてはならない。そこへ戻れと作者グリーンは結んだ。

以上、本作品にみるグリーン的世界を、見出しにより、技法、内容の両面から明らかにした。加うるに、グリーンの作品に登場する人物は、皆弱者や失敗者であり、ウィンダムの言葉を借りるなら「彼らは人間としての実態と重要性を備えていて、救われるにしろ失われるにしろともかく魂を持っている」のである。彼らは、私たちの回りにいつでもどこにでもいる人々なのであって、決してグリーンランド（この言葉はグリーンが最も嫌っている）などと呼ばれる特別な国の住人などではないのである。そして、これら孤独な、社会からしいたげられた人々に寄せる作家グリーンの強い共感が、彼の総ての作品を温かな血脈の如く貫いていることを忘れてはならない。

Text

“Twenty-one Stories” by Graham Greene, Penguin

Notes

1. “Graham Greene” by A. A. De Viits, Twayne, 1986
2. “The Basement Room” by Graham Greene

3. "The Lawless Roads" by Graham Greene, Penguin P. 14
4. "A Sort of Life" by Graham Greene, Penguin P. 12
5. "The Life of Graham Greene" by Norman Sherry, Jonathan Cape, 1989
6. Miss Jessel & Quint from "The Turn of the Screw" by Henry James
7. "A Sort of Life" P. 12
8. Ibid, P. 79
9. "L'Autre et son double" by Marie-Francoise Allain, 1981
(English Edition; "The Other Man", Penguin, p. 30)
10. "The Lawless Roads" P. 14
11. "A Sort of Life" P. 60
12. Ibid.
13. "The Other Man" P. 33
14. "A Sort of Life" P. 87
15. 「グレアム・グリーン」一人と作品—：ヴィクトル・ド・パンジュ (河出新書) 1956
16. "A Sort of Life" P. 90 & "The Life of Graham Greene" by N. Sherry, P. 90
17. Heroes of "Twenty-one Stories"
18. 「グレアム・グリーン」一人と作品—：ヴィクトル・ド・パンジュ

References

1. 奥井潔 「グレアム・グリーン, 管見」, 白山英文学, 1983
2. Roger Sharrock "Saints, Sinners and Comedians", Burns & Oates, 1984
3. Daphna Erdinast-Vulcan "Graham Greene's Childless Fathers", Macmillan, 1988
4. Richard Kelly "Graham Greene", Frederick Ungar, 1937
5. Paul O'Prey "Graham Greene", Thames and Hudson, 1988
6. R. W. B. Lewis "The Picaresque Saint", Victor Gollancz, 1960
7. John Atkins "Graham Greene", John Calder, 1957
8. Francis L. Kunkel "The Labyrinthine Ways of Graham Greene", Sheed & Ward, 1959
9. Robert O. Evans "Graham Greene", Kentucky Paperbacks, 1967
10. William R. Mueller "The Prophetic Voice in Mordern Fiction", Association Press, 1959
11. John Seland "Graham Greene: His Arguments against Society and the Church", 「アカデミア」, 1987
12. Graham Smith "Graham Greene", The Harvester Press, 1986 etc.

(This essey could not have been written without the encouragement and love of Prof. Kiyoshi Okui and Fr. John Seland.)